

ホームページに世界の大学戦略を見る

(30) アメリカの高等教育の情報公開の現状

# ステークホルダーに わかりやすくデータベース化

山田礼子 同志社大学教授

## 日本における情報公開の議論

2009年から2010年にかけての中央教育審議会大学分科会では、情報公開が喫緊の課題として取り上げられている。情報の積極的な公表に関しては、学校教育法第113条において、「大学は、教育研究の成果の普及及び活用の促進に資するため、その教育研究活動の状況を公表するものとする」とあり、大学設置基準の第2条でも、積極的に情報を提供することが規定されている。確かに、2008年度の文部科学省の調査によると、大学のホームページの開設状況は100%に上っているという。しかし、教員数や学生数、シラバス、教育の状況についても情報の掲載の体裁が多様であるだけでなく、基本的な情報も掲載されていない大学もあるという。また、自己点検・評価の結果公表についても、公表が求められているものの、結果を公表していない大学もあるそうだ。

一方、学生、高校生、保護者、社会全般を含めたステークホルダーによりわかりやすく、かつ他の大学とも比較可能になるような形で情報を公開すべきであるという意見も少なくない。こうした議論からアカウントビリティという問題をもはや避けて通れない環境に大学が置かれていることが見えてくる。

## スプリングス・レポートでのデータベースをめぐる議論

それでは、アメリカの大学の情報公開の状況はどうだろうか。今回は、情報公開をキーワードにアメリカの高等教育機関の状況を見ていく。アメリカの情報公開は、高等教育機関全体としての情報公開の統一性と、個別大学における個々の情報公開の状況という2つの視点から見渡すことが肝要である。全米の高等教育機関等をデータ収集の対象

としているのが包括的なデータベースシステム、IPEDS (Integrated Postsecondary Education Data System) である。IPEDSに対しては、個々の高等教育機関がもし連邦政府の奨学金プログラム等に申請するとすれば、データ提出が実質上義務づけられている。

IPEDSに提出するデータは、機関特性、学位レベル別の修了者数データ、在籍者数、授業時間数、フルタイム換算の在学者数、人的資源、在籍者の状況、財務面、学生への資金援助、卒業率などである。財務面では、例えば、各大学は資金源ごとの収入、活動ごとの支出、施設、負債、基金などの財務情報を提出する。個別機関は、IPEDSデータベースから、ベンチマークとして類似機関と比較することもできる。

IPEDSに提出するデータを処理する部門は、IR (機関研究)と呼ばれる部門であり、IR部門の担当者がデータの取扱い、提出、IPEDSデータベースの使用方法などについて学会が開催するワークショップで学び、データ処理やデータベースを利用している。そういった点で、IPEDSはどちらかというところIR担当者等専門家向けのデータベースであるため、一般の学生、高校生、保護者そして社会全般のステークホルダーには使いにくく、わかりにくいという批判もされてきた。

そうした批判の象徴ともいえるできごとが、2006年9月に公表されたアメリカ教育相長官マーガレット・スプリングスによるスプリングス・レポートであった(A Test of Leadership: Charting the Future of U.S. Higher Education)。スプリングス・レポートでは、アクセス・アフォーダビリティ、アカウントビリティという3つのキーワードを掲げ、高等教育システムの改革を推し進めることを企図していた。アクセスは、高等教育機会の拡大を意味しており、アフォーダビリティは、高等教育のコストに関係した概念であ

る。そしてアカウントビリティが、情報公開、そして拡大する高等教育予算に対して学生の学習成果を目に見える形で示すこと的前提となる概念としてレポートの中で示されている。

アメリカでは情報公開をTransparency (透明性) という言葉で表現しており、透明性には誰にもわかりやすい内容で示すという意味がある。情報公開を、学生、高校生、保護者、そして社会全般が理解できる内容で、かつ高等教育機関ごとに比較できるように示すことを求めたのがスプリングス・レポートであった。

## 公立大学 300 校によるデータベースの構築

### ・高校生が大学を比較して選べる

レポートにこたえて、構築されたデータベースが、2007年12月より開始したVoluntary System of Accountability (VSA)のThe College Portraitである。

<http://www.collegeportraits.org/>

VSAは公立の4年制大学が参加しているデータベースであり、The College Portraitと呼称される共通のフォーマットによるウェブ上のレポートで、学士課程教育段階の基本的で比較可能なデータを、学生、高校生、保護者を含む社会全般に提供するために開発された。

米国国立大学協議会 (American Association of State Colleges and Universities以下 AASCU) と米国国立大学・土地付与大学協議会 (the Association of Public and Land-grant Universities以下 APLU) の学長、学部長等の関係者がVSAデータベースの開発と構築に関わった。現在は上記の2つの協議会が運営している。主な機能は、①高校生が大学選択をしやすいうツールを提供、②透明性のある、比較可能で、理解しやすい情報を掲載、③公共へのアカ



<http://www.collegeportraits.org/>

ountビリティに対応、④効果的な教育実践を把握し高めるための教育成果を測定といった4点にまとめられる。

AASCUとAPLUへの加盟校数は500ほどであるが、加盟校のうち、現在は約300校がThe College Portraitに参加している。

次に、The College Portraitにはどのような情報が提供され、機関ごとの比較はどの程度わかりやすいかを検証してみよう。州立大学、特に前身が土地付与大学によるデータベースが前提であるため、機関ごとの比較といった場合に、同じ州立大学システムに属している大学同士の比較が最も基本的な使い方になる。例えば、カリフォルニア州の場合には、マスタープランにより、州立大学システムは、UCシステム(研究大学)を頂点に、CSUシステム、コミュニティ・カレッジシステムの3層構造である。州立大学とは別に、スタンフォード大学、ポモナカレッジ、南カリフォルニア大学、クレアモントカレッジ、ペパーダイン大学などの私立大学が別途存在している。CSU間だけでしか情報の比較はできない。もちろん、他州の州立大学との比較は可能であるが、アメリカの場合、州立大学は州予算によって運営されており、かつ州民学生の学費と州外学生の学費の設定が異なることから(州外学生の学費は州民としての資格を得るまでは、高額に設定されている)、一般的には州立大学に進学する高校生の大多数は同一州内出身者である。(もちろん、トップレベルの州立の研究大学に進学する場合は他州に進学する場合も多々ある。)したがって、最も簡便な使い方は同一州内での比較ということになるわけだ。

### ・3つの分類で情報公開

情報は大きく3つに分類される。第一は学生や保護者にとっての基本的な情報であり、在学生情報、卒業率やリテンション率、授業料や奨学金情報、入試情報、取得学位、学位プログラム、生活コストや生活環境、キャンパスの安全状況、卒業後の進路、カーネギー分類による機関情報から構成されている。

第二は、学生の経験の状況調査や満足度など意識調査結果をまとめたレポートから成り立っている項目だが、共通の調査としてNational Survey of Student Engagement (以下 NSSE) という学生調査が共通調査として利用されている。NSSEは、ジョージ・クー博士たちが中心となって開発し、現在インディアナ大学ブルーミントン校の中等後教

育研究センターが運営管理している学生調査であるが、学生の経験や学習時間、満足度などの項目から成り立っている間接評価として多くの高等教育機関で利用され、結果を教育改善のために活かしてきた信頼性、妥当性の高い調査である。

第三は、学生の学習成果に関する情報である。実は、この学生の学習成果の情報の透明性はスペリングスレポートからの強い圧力が加えられた点でもあった。スペリングスレポートでは、大学の4年間の学習成果の指標として標準テストの導入と標準テストによる測定結果を公表することが高等教育機関のアカウントビリティであると、それを提言したのである。その結果、アメリカの高等教育機関では、より具体的かつ明確な成果を示すことがアカウントビリティとされ、地区別基準協会も個別の機関に対して学習成果を何らかの指標を用いて明示することを要求するようになってきている。The College Portrait 参加大学はこの学習成果にCLAと呼ばれる標準試験を共通のフォーマットとして用いて、その結果を公表している。CLAは大学で学んだ成果を標準的に測定し、大学間での比較を可能にするような測定ツールとして開発された標準試験であり、「クリティカル・シンキング」「分析的理由づけ」「問題解決」「文章表現」を包摂した包括的な能力を測定することを目的として開発された。本データベース上では、大学間での教育効果を比較するために、低学年時にCLAを受けた学生に上級学年時にも再度CLAを受けさせるという「value added」方式を導入し、一定の期間での得点の伸張を測定し、その結果を公表している。

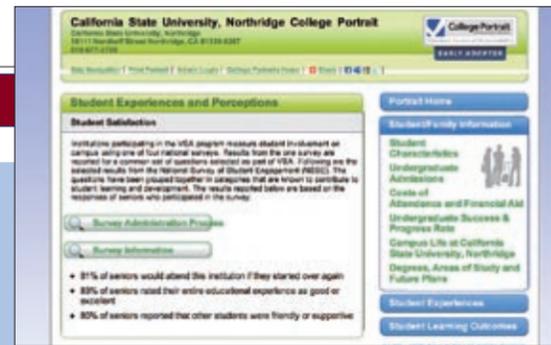
### CSU ノースリッジ校とCSU ロングビーチ校の比較

カリフォルニア州立大学ノースリッジ校と同大学ロングビーチ校を比較してみよう。実は、筆者自身、市販の入試情報広報誌や大学ランキングブックには、2大学の入学難易度などは「同程度」という情報が掲載されているため、本データベースにアクセスしてみるまでは、差異はないと予想していた。

ノースリッジ校を見てみよう。

<http://www.collegeportraits.org/CA/CSUN/satisfaction>

2002年度入学のフルタイム新生の79%が4年後に卒業しているか、4年後にまだ履修中であることが示されてい



<http://www.collegeportraits.org/CA/CSUN/satisfaction>

る。Success & Progress Rate Tableを開いてみると、ノースリッジ校のフルタイム学生中から、2007-08年度におけるノースリッジ校の学位を取得して卒業する率は46%、他の4年制大学に編入し、編入先大学の学位を取得する率は43%、2年制の短期大学の学位を取得して卒業する率は1.2%、総計51.5%という表が掲載されている。2007年のフルタイム新生が2008年に残留した比率は74%である。

2008年度新生の入試実績を見てみると、出願者は23298人、合格者は17411人、実際の入学者は4625人である。高校時代のGPA (Grade Point Average)平均は3.08 (出願者全体であるのか、合格者のみを対象かは明記されていないので不明)、高校時代の成績が上位25%の学生比率は3%、上位50%までの学生は97%となっている(出願者全体であるのか、合格者のみを対象かは明記されていないので不明)。

次に、学習成果の獲得状況を見る。ノースリッジ校では、2つの標準試験を1年次と4年次に実施し、その間の学生の学力・スキルの獲得度を測定している。CLAのa performance taskテストの1年次の平均は970点、4年次の平均は1068点、記述式の作文試験の得点平均は、1年次1043点、4年次1285点である。SATと呼ばれる入学試験の標準試験も1年次および4年次に受験させているが、その得点平均はそれぞれ910点と978点である。

次に、ロングビーチ校の状況と同じ項目について見てみよう。

[http://www.collegeportraits.org/CA/CSULB/undergrad\\_success](http://www.collegeportraits.org/CA/CSULB/undergrad_success)

2002年度入学のフルタイム新生の90%が4年後に卒業しているか、4年後にまだ履修中であることが示されている。ノースリッジ校と比べるとその比率は高いが、このロングビーチ校では卒業率比率よりも、在籍して授業を履修している学生の比率が圧倒的に高いことをグラフが示している。次に、Success & Progress Rate Tableを開いてみると、

フルタイム学生のなかから、2007-08年度におけるロングビーチ校の学位を取得して卒業する率は55.8%、他の4年制大学に編入してその大学の学位を取得する率は41%、2年制の短期大学の学位を取得して卒業する率は1.0%となっており、ノースリッジ校よりも、在籍している大学での学位を取得して卒業する比率が約10%ポイントほど高いことがわかる。2007年のフルタイム新生が2008年に残留した比率は86%であり、この比率もノースリッジ校よりもかなり高い。

2008年度新生に関する入試実績を見てみると、出願者は48542人、合格者は20391人、実際の入学者は4606人である。合格率はノースリッジ校よりはかなり低く、選抜度は高いとも見ることができる一方で、入学者数はそれほどノースリッジ校と変わらない。他の大学を第一志望として、本大学を第二志望としている学生が多いのかもしれない。高校時代のGPA平均は3.37、高校時代の成績が上位25%の学生比率は84%、上位50%までの学生は100%となっていることから、かなり高校時代の成績上位群が出願あるいは合格しているともいえる(いずれの数値も出願者全体であるのか、合格者のみを対象かは明記されていないので不明)。

それでは、学習成果の獲得状況について見てみよう。CLAのa performance taskテストの1年次の平均は1138点、4年次の平均は1210点、記述式の作文試験の得点平均は、1年次1177点、4年次1232点である。SATと呼ばれる入学試験の標準試験も1年次および4年次に受験させているが、その得点平均はそれぞれ1055点と1032点である。

このように同じ州立大学に所属する分校であっても、入学者のプロフィールを見るとロングビーチ校の新生のほうがノースリッジ校の新生よりも高校時代の学業成績や入学時点での標準試験の結果も高いことが示されている。しかし、入学時の学力やスキルが4年次にどう変化しているのかを測定することが学習成果という視点で2校を比較すると別の結果が見えてくる。

両大学の1年生と4年生のCLAの得点結果を見る限りは、両大学とも4年生の得点の方が高い。CLAは一般教育で身につけるべき能力や技能を測定する標準試験であるから、それなりの効果が上がっていると受け止めることは可能である。入学時の学力はロングビーチ校の学生の方が高いが、伸び率はノースリッジ校の方が高い。特に、文章表現

力の得点に顕著に表れている。また、SATの得点については、1年次と4年次の平均点数自体がロングビーチ校の方が高いが、ロングビーチ校では入学時よりも、4年次の得点が下がっていることがわかる。こうしてみると、一見、入学してくる学生の学力はロングビーチ校の方が高いが、大学での教育の効果が表れているのはノースリッジ校であるとも見ることができるわけだ。

しかし、両校ともに(すべての参加校も同様に)受験者を厳密に管理していないため、1年次に受けた学生が4年次にすべてCLAやSATを受験しているわけではない。また、全体学生数の何%に当たる学生がこうした2種類の標準試験を受験しているかというデータは明らかにされていない。したがって、データベース上のデータから、いずれの大学の教育力が優れ、学習成果が上がっているのか、あるいはCLAやSATテストの信頼性や妥当性の検証に結びついていないということは判断できない。とはいえ、ランキング誌や入試情報誌の情報をベースに2校は同レベルであると予想していたが、本データベースを使って比較してみると、異なるプロフィールを知ることができた。そういう意味では、わかりやすい情報データベースであるといえるだろう。

### 大学の種別化を前提とした情報公開

しかし看過できない重要な点がある。すでに読者は気づかれていると思うが、データベースには、教育を中心に据える州立大学と前身がランドグラント大学のみが現在参加していることである。参加校の中には、ノースカロライナ州立大学チャペルヒル校やウィスコンシン州立大学マジンソン校といったトップの研究大学も参加しているが、参加校の大多数は大衆化を担ってきた州立大学である。

私立大学や威信度の高い州立研究大学はこのデータベースには参加していないだけでなく、CLAといった標準試験を学習成果の測定ツールとして利用していないことも事実である。その意味では、カーネギーの大学分類にもとづいて大学の種別化が進み、かつそうした種別ごとに工夫された学習成果の測定が開発され、データベースも構築されていく可能性も高い。アメリカの情報公開の動向を検討してみると、日本においても、今後の情報公開や学習成果の測定の開発を進めるうえで、高等教育の種別化に関する議論を避けることはできないのではないだろうか。